

週末に絵画教室のようなものを始めて40年を超え、よつなどは教室の体を成していないかもしれないからだ。先生などと呼ばれるのも面はゆく、渾名だと自分を納得させた。

そもそも教えるという頭

がない。通われる人たちは甚だ失礼のようだが、絵の世界に持ち込むのは心地悪い。作品は描く人のもの。だから手を入れることも極力避けたい。僕の役目は、

個の特質を注視、尊重し、一緒に考えながらアドバイスすること。

それでは困ると、中にはすぐにやめる人もいるが、何十年と続く人も多い。上手になりたいとは誰しも思うことかもしれないが、ウマイ、ヘタよりも絵の中に自身を解放し、いい絵を描いてほしいのだ。

ここに通う人の立場や職業はバラバラ。厄介なものを抱える人、世の中になじめない人だっている。だが、白い紙やキャンバスに向かうのは皆同じ。一人になつて、思いつ切り自分を生かしてもらいたい。

描く題材にはけっこう苦心する。こんなものを？ときよとんとされるようなもの

### 絵画教室のようない

のときに出す。狭い決めでせよ、万物に初めて出会ってゆく子供のころのよういな、新鮮な驚きを思い出してほしいからだ。

また絵でも描かない限り、対象物を何時間も見続けることはまずない。その中で、知っていると思つていたものが知らないものに

見えてくるかも。たしかに真新しい目で見るのは難しい。だが慣れ固まった殻を壊し見方を広げれば、日々の豊かさにもつながる。そうしなければしめたもの。

美大受験生も多く見てきたが、試験用修練スタイルで縛りたくはない。腕前が



ただ上がることで錯覚を起こし、燃やすべき若いスピリットを溜らしてしまう恐れがある。目指すからには手解きもするが、ひとつのスタイルに過ぎないと釘を刺す。いつか自分ならではを見付けてと。

美術の広い世界を知って

もらいたいと、絵に限らず全く別のことからそれとなく話をする。聞き耳を立て反応してくれる人もいるが、関心が向かない人も。この四季録だつてしかり。それでも時折話す。

体温が上がるくらい熱中して描く人、淡々と写生する人、健康のためと考える人、日常を離れた時間を過ごしたい人。思いはそれぞれ。そんな人たちに、少しでも充足できる空間を提供できていればいいのだが。とてもうれしかったこと

を一つ。80代の女性。「教室の帰り道、心臓がドキドキしてなぜだろうと思つたんです。それは絵を描いた高まりでした」。70代の男性。「家でも絵を描きたくなり、生まれて初めて花屋に行き、花を買いました」

(吉田 淳治・画家)